



学童保育の手伝い

再び岩手県大槌町へ⑥

大槌町の学童保育、正式には大槌町放課後児童クラブ。大槌町では被災した四つの小学校と一つの中学校、一つの仮説校



学童にリコーダーを披露

舎を使用している。

小学一年から三年までの低学年の子供を対象に、親が働くなど家に帰っても誰もいない子供のために放課後に子供たちの世話をするのが学童保育である。登録している子供は四十五人だが、通常は二十五人から三十人ほどが利用しているという。

働いている親には春休みや夏休みはないので、学校の休み期間中も開かれ、子供たちは通常の学校始業時から夕方まで学童保育で過ごし、弁当を持参する。

冬休みと春休みの期間中にボランティアに出かけた私たちには、休み中の学童保育の手伝いも主な仕事の一つ



大学院生の三味線が子供を引きつけた

大学院生の彼は楽器のケースを持参していたが、子供たちの前で開けてびびくり、中から出て来たのは三味線である。小学五年のころから習っていたそうだが、演奏が終わっても珍しい三味線に子供たちが群がる。

幼稚園の先生を中心としたリコーダーの演奏も子供を引きつけたが、とにかく楽器の演奏はこんな時、役立つ。何一つ演奏できない自分が情けなくなる。

ところでボランティアに出席する前、団長の柴田神父から「被災地の子どもの心に寄り添う」という一冊の本が送られてきた。本の内容よりも被災地の子供たちのために少しでも役に立ちたいという

神父の真摯(しんし)な気持ちに心を打たれた。

参加したボランティアが自分にできることを考え、それがどれだけ被災地の子供に役立ったかはわからない。しかし他者のために役立つ立ちたいと努力したことは間違いない。それは間違いなく、それがこれから自分自身が生きていく上に大きな糧になったように思える。

〈お知らせ〉

この巡礼記のホームページは、手伝って下さる方の入院で四月十二日以降、更新していませんが、退院され今週から新しく更新されている。「ふじやかんじ」で検索すると今回のシリーズも見ることができるとが。

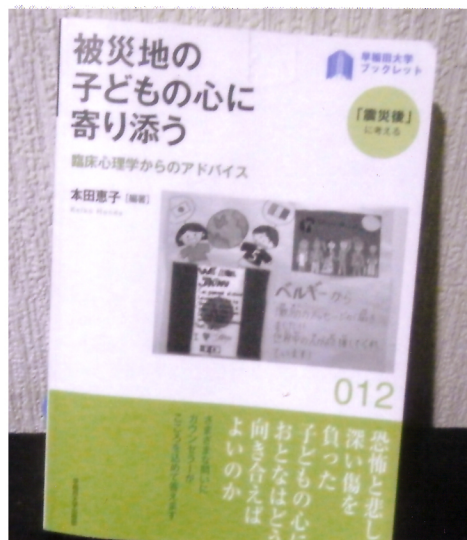
である。

子供は一年で大きく成長する。一年生と三年生では体格はもちろんだが、学業もかなりの差がある。その差のある一年生から三年生までが一つのクラスで保育されている。前回の冬休み中のボランティアでも感じたことだが、一年生は大人しいが、三年生は教室内を走ったり、けんかをしたりする傾向があり、複式授業の難しさを感じる。

今回は十九人のボラ

ンティアの大半が二日間、学童保育を手伝った。ボランティアの中には五人の幼稚園の先生がいたが、学童保育の先生は幼稚園の先生より高齢で、一緒に走ったり遊んでくれるボランティアの学生や幼稚園の先生は人気の的だ。

特に昨年夏のボランティアにも参加した大学院生を子供たちは覚えており「お兄ちゃん、こっちに来て」「一緒に弁当を食べよう」と声がかかる。



神父から送られてきた本